

琵琶伝

泉鏡花

青空文庫

新婦が、とこさかざき床杯をなさんとて、座敷より休息の室まに開きける時、介添の婦人おんなはふとその顔を見て驚きぬ。

面貌めんぼうほとんど生色なく、今にも僵たおれんずばかりなるが、ものに激さしたる状さまなるにぞ、介添は心こころ許もとなげに、つい居まて着換かを捧たげながら、

「もし、御気分でもお悪いのじゃございませんか。」
と声こゑを密ひそめてそと問いぬ。

新婦は凄せ冷れいなる瞳まなこを転まじて、介添を顧かみつ。

「何。」

とばかり簡単に言捨てたるまま、身さえ眼をさえ動かさで、一心ただ思うことあるその一方を見詰めつつ、衣を換うるも、帯をし緊むるも、衣紋えもんを直すも、褌つまを揃うるも、皆他ひとの手に打任せつ。
尋常ただならぬ新婦の気色あやぶを危あやぶみたる介添の、何かは知らずおどおどしながら、

「こちらへ。」

と謂いうに任せ、渠かれは少しも躊躇ためらわで、静々と歩を廊下に運びて、やがて寢室いんしつに伴われぬ。

床にはハヤ良人おととありて、新婦きんむすめの来るを待ちおれり。渠は名を近藤重隆と謂う陸軍りくぐんの尉官いかんなり。式は別に謂わざるべし、媒なこうど灼しやくの

妻退き、介添おんなの婦人皆罷出まかんでつ。

ただ二人、閨ねやの上に相對し、新婦は屹きつと身体からだを固めて、端然として坐したるまま、まおもてに良人の面おもてみまもを瞻りて、打解けたる状さま毫すこしもなく、はた恥らえる風情も無かりき。

尉官は腕こまぬを拱こまぬきて、こもまた和やわらぎたる体ていあらず、ほとんど五分時ばかりの間、互に眼と眼を見合せしが、遂さに良人まず肅さびたる声にて、

「お通。」

とばかり呼懸よけつ。

新婦の名はお通ならむ。

呼よばるるにこたへて、

「はい。」

とのみ。渠は判然きつぱりともものいえり。

尉官は太く苛立いたいらだつ胸を、強いて落着けたらんごとき、沈める、

力ある音調もて、

おまえ「汝、よく娶きたな。」

お通は少しも口籠くちごもらで、

「どうも仕方がございません。」

尉官はしばらく黙しけるが、ややその声を高うせり。

「おい、謙三郎はどうした。」

「息災おで居ります。」

「よく、汝おまえ、別れることが出来たな。」

「詮方がないからです。」

「なぜ、詮方がない。うむ。」

お通はこれが答をせで、懐中ふところに手を差入れて一通の書を取出し、良人の前に繰広げて、両手を膝に正してき。尉官は右手めでを差し、身近しのばに行燈あんどんを引寄せつつ、眼まなこを定めて読みおろしぬ。文字もんじは蓋けだし左さのごときものにてありし。

お通に申残し参らせ候、御身おんみと近藤重隆殿とは許いいなすけ婚けに有これあり之候

然しかるに御身は殊の外か彼の人を忌嫌いやい候様子、拙者の眼まわに相見え候むすめえば、女むすめながらも其そのよし由よしのいい聞きけ難がたくて、臨終いまわの際きわまで黙もくし候

さ候えども、一旦親戚の儀を約束いたし候えば、義理堅かりし重隆殿の先人に対し面目なく、今さら変替相成らず候あわれ犠牲いけにえとなりて拙者の名のために彼の人に身を任せ申さるべく、斯の遺言を認め候時の拙者が心中の苦痛を以て、御身に謝罪いたし候

月 日

清川 通知みちとも

お通殿

二度三度繰返して、尉官は容かたちあらたを更めたり。

「通、吾おれは良人だぞ。」

お通は聞きて両手を支つかえぬ。

「はい、貴下あなたの妻でございます。」

その時尉官は傲然ごうぜんとして俯向うつむけるお通を瞰下みおろしつつ、

「吾のいうことには、汝おまえ、きつと従うであらうな。」

こなた此方は頭を低たれたるまま、

「いえ、お従わせなさらなければ不可いけません。」

尉官は眉を動かしぬ。

「ふむ。しかし通、吾を良人とした以上は、汝、妻たる節操は守らうな。」

お通は屹きつと面を上げつ、

「いいえ、出来さえすれば破ります。」

尉官は怒気心頭を衝つきて烈火のごとく、

「何だ！」

とその言を再びせしめつ。お通は怯おめず、臆おくする色なく、

「はい。私に、私に、節操を守らねばなりませんという、そんな、義理はございせんから、出来さえすれば破ります！」

恐おそれ気もなく言放てる、片頬へに微笑えみを含みたり。

尉官は直ちに頷うなずきぬ。胸中あらかじ予めこの算ありけむ、熱の極は冷となりて、ものいいもいと静しずかに、

「うむ、きつと節操を守らせるぞ。」

渠は唇頭しんとうに嘲ちやうしやう笑しやうしたりき。

相本謙三郎はただ一人清川の書齋に在り。当所もなく室の一方
を見詰めたるまま、默然として物思えり。渠が書齋の椽前に
は、一個数寄を尽したる鳥籠を懸けたる中に、一羽の純白なる
鸚鵡あり、餌を啄むにも飽きたりけむ、もの淋しげに謙三郎の後
姿を見遣りつつ、頭を左右に傾けおれり。一室寂たることしばし
なりし、謙三郎はその清秀なる面に鸚鵡を見向きて、太く物案ず
る状なりしが、憂うるごとく、危むごとく、はた人に憚ることあ
るもののごとく、「琵琶。」と一声、鸚鵡を呼べり。琵琶とは蓋
し鸚鵡の名ならむ。低く口笛を鳴すとひとしく、
「ツウチャン、ツウチャン。」

と叫べる声、奥深きこの書齋を徹して、一種の音調打響くに、

謙三郎は愁然しゆうぜんとして、思わず涙を催しぬ。

琵琶は年久しく清川の家に養われつ。お通と渠が従兄なる謙三郎との間に処して、巧みにその情交を暖めたりき。他なし、お通がこの家の愛娘まなむすめとして、室を隔てながら家を整したりし頃、いまだ近藤に嫁がざりし以前には、謙三郎の用ありて、お通に見えんと欲することあるごとに、今しも渠がなしたるごとく、籠の中なる琵琶を呼びて、しかく口笛を鳴すとともに、琵琶が玲瓏れいろうたる声をもて、「ツウチャン、ツウチャン。」と伝令すべく、よく馴ならされてありしかば、この時のごとく声を揚げて二たび三たび呼ぶとともに、帳内深き処しゆくとして物を縫う女、物差を棄て、針を措おきて、ただちに謙三郎に来りつつ、笑顔を合すが例なりし

なり。

今やなし。あらぬを知りつつ謙三郎は、日に幾回、夜よに幾回、果敢はかなきこの児戯を繰返すことを禁じ得ざりき。

さてその頃は、征清せいしんの出師すいしありし頃、折はあたかも予備後備に対する召集令の発表されし折なりし。

謙三郎もまた我わがくに国徴兵の令に因りて、予備兵の籍にありしかば、一週日以前既に一度ひとたび聯隊に入営せしが、その月その日の翌あくるひ

日は、旅団戦地に発するとて、親戚しんせき父兄の心を察し、一日の出営を許されたるにぞ、渠は父母無き孤兒みなしごの、他に繫累けいらいとてはあらざれども、児ことして幼少より養育されて、母とも思う叔母に会して、永き離別わかれを惜おしまんだため、朝来きたここに來りおり、聞きくこ

ともはた謂うことも、永き夏の日に尽きざるに、帰宮の時刻迫りたれば、謙三郎は、ひしひしと、戎衣じゆういを装い、まさに辞し去らんとして躊躇ちゆうちよしつ。

書齋ものに品あり、衣兜かくしに容るるを忘れたりとて既に玄関まで出でたる身の、一人書齋に引返しつ。

叔母とその奴婢どひの輩やからは、皆玄関に立併たちならびて、いずれも面に愁し色ゆうしよくあり。弾丸の中ゆに行く人の、今にも来きたると待ちけるが、五分を過ぎ、十分を経て、なお書齋より来らざるにぞ、謙三郎はいかにせしと、心々に思える折から、寂として広き家の、遥奥はるかの方かたよりおとずれきて、

「ツウチヤン、ツウチヤン。」

と鸚鵡の声、聞き馴れたる叔母のこの時のみ何思いけん色をかえて、急がわしく書齋に到れり。

謙三郎は琵琶に命じて、お通の名をば呼ばしめしが、来るべき人のあらざるに、いつもの事とはいいなながら、あすは戦地に赴く身の、再び見、再び聞き得べき声にあらねば、意を決したる首途にも、渠はそぞろに涙ぐみぬ。

時に椽側に登あしおと音あり。女々しき風情を見られまじと、謙三郎の立ちたる時、叔母は早くも此方こなたに來りて、突いきなり然鳥籠ふたの蓋を開けつ。

驚き見る間に羽ばたき高く、琵琶は籠ろうちゆう中を逸し去れり。

「おや！ 何をなさいます。」

と謙三郎はせわしく問いたり。叔母は此方こなたを見も返らで、琵琶の行方を瞻みまもりつつ、椽側に立ちたるが、あわれ消残る樹間このまの雪か、
 緑りよくすい 翠みまも 暗きあたり白き鸚鵡の見え隠れに、蝸ひぐらし一声鳴きける時、
 手をもつて涙を拭ぬぐいつつ徐しずかに謙三郎を顧みたり。

「いいえね、未練が出ちやあ悪いから、もうあの声を聞くまいと思つて。……」

叔母は涙の声を飲みぬ。

謙三郎は羞はじたる色あり。これが答はなさずして、胸の間の釦ボ鈕タンを懸けつ。

「さようなら参ります。」

とつかつかと書齋を出いでぬ。叔母は引添うごとくにして、その

左側に従いつつ、歩みながら口早に、

「可いかい、先さつき刻謂いつたことは違えやしまいね。」

「何ですか。お通さんに逢あつて行ゆけとおおつしやつた、あのことで
すか。」

謙三郎は立たちどま留りぬ。

「ああ、そのこととも、お前、軍いくさに行くという人に他ほかに願ねががある
ものかね。」

「それは困りましたな。あすこまでは五里あります。今朝だと腕く
車るまで駈かけて行いつたんですが、とても逢あわせないといいますから行
こうという気もありませんでした。今ツからじゃ、もう時間じかんがご
ざいませぬ。三十分間、兵營へいえいまでさえ大おお急いそぎでございませぬ。飛

んだ長座をいたしました。」

謂うことを聞きも果てず、叔母は少しく急き込みて、

「その言は聞いたけれど、女の身にもなつて御覧、あんな田舎へ
おしこ
推込まれて、一年越外出も出来ず、折があつたらお前に逢いたい

一心で、細々命を繋いでいるもの、顔も見せないで行かれちゃあ、

それこそ彼女は死んでしまうよ。お前もあんまり察しが無い。」

と戎衣を捉えて放たざるに、謙三郎は困じつつ、

「そうおっしゃるも無理ではございませんが、もう今から逢いま
すには、脱營しなければなりません。」

「は、脱營でも何でもおし。通が私や可哀そうだから、よう、後
生だから。」

と片手に戎衣の袖を捉えて、片手に拝むに身もよもあらず、謙三郎は蒼あおくなりて、

「何、私の身はどうなろうと、名誉も何も構いませんが、それでは、それではどうも国民たる義務が欠けますから。」

と誠まごころ心籠こめたる強こわねき声音も、いかでか叔母の耳に入るべき。

ひたすら頭こうべを打うち掉ふりて、

「何が欠けようとも構わないよ。何が何でも可いんだから、これたった一目、後生だ。頼む。逢って行ってやっておくれ。」

「でもそれだけは。」

謙三郎のなお辞するに、果はては怒いかりて血相かえ、

「ええ、どういっても肯きかないのか。私一人だから可いと思つて、

伯父さんがおいでの時なら、そんなこと、いわれやしまいが。え、お前、いつも口癖のように何とおいいだ。きつと養育された恩を返しますツて、立派な口をきく癖に。私がこれほど頼むものを、それじゃあ義理が済むまいが。あんまりだ、あんまりだ。」

謙三郎はいかんとも弁^{いいわけ}疏^{ことば}なすべき言を知らず、しばし沈思して頭^{こうべ}を低^たれしが、叔母の背^{せな}をば搔^か無^{いな}でつつ、

「可^ようございます。何とでもいたしてきつと逢つて参りましょう。」

謂^{ふり}われて叔母は振^あ仰^{おむ}向^むき、さも嬉^{あやぶ}しげに見^あえたるが、謙三郎の顔の色の尋^た常^だならざるを危^{あやぶ}みて、

「お前、可^よいのかい。何ともありやしないかね。」

「いや、お憂慮きづかいには及びません。」
 といと淋しげに微笑ほほえみぬ。

三

「奥様これ、どこへござらっしゃる。」

と不意に背後うしろより呼留められ、人は知らずと忍び出でて、今しもようやく戸口いたに到れる、お通はハツと吐胸とむねをつきぬ。

されども渠かれは聞かざる真似して、手早く鎖じょうを外ひつさんとなしける時、手燭てしよく片手に駈出かけいでて、むずと帯際ひつを引捉とらえ、掴つか戻かみせ
 る老人あり。

頭髪あたかも銀のごとく、額兀はげて、髯ひげまだらに、いと嚴いかめし
 き面つらがまえ構よなかの一癖あるべく見えけるが、のぶとき声にてお通しかを呵
 り、「夜夜中よなかあてこともねえ駄目なこつた、断あきらめ念あきらめさつせい。三
 原伝内が眼張がんばつてれば、びくともさせるこつちやあねえ。眼くらを眩
 まそうとつてそりや駄目だ。何の戸外おもてへ出すものか。こつちへご
 ざれ。ええ、こつちござれと謂いうに。」

お通は屹きつと振返り、

「お放し、私がちよつと戸外おもてへ出ようとするのを、何のお前がお
 構かまいでない、お放しよ、ええ！ お放してば。」

「なりましねえ。麻畑の中へ行つて逢おうたつて、そうは行ゆかね
 え。素直にこつちへござれツていに。」

お通は肩を動かしぬ。

「お前、主人をどうするんだえ。ちつと出過ぎやしないかね。」

「主人も糸瓜へちまもあるものか、吾おれは、何でも重隆様のいいつけ通りにきつと勤めりやそれで可いいのだ。お前めえさま様が何と謂いつたつて耳にも入れるものじゃねえ。」

「邪じやけん険も大抵にするものだよ。お前あんまりじゃないかね。」

とお通は黒く艶つやかな瞳をもつて老夫の顔をじろりと見たり。伝内はビクともせず、

「邪いんごう険でも因いんごう業でも、吾、何にも構わねえだ。旦那様のおつしやる通りきつと勤めりやそれで可いいのだ。」

威をもつて制することならずと見たる、お通は少しく気色を和

らげ、

「しかしねえ、お前、そこには人情というものがあつたわね。まあ、考えてみておくれ。一昨日おとといの晩はじめて門をおたたきなすつてから、今夜でちょうど三晩の間、むこうの麻畑の中に隠れておいでなすつて、めしあがるものといつちや、一粒の御飯もなし、内に居てさえひどいものを、ま、蚊かや蝸ぶよでどんなだろうねえ。脱營をなすつたつて。もう、お前も知つてゐる通り、今朝ツからどの位、おしらべが来たか知れないもの、おつかまりなさりやそれツきりじやあないか。何の、ちよつとぐらい顔を見せたからつて、見たからつて、お前、この夜中だもの、ね、お前この夜中だもの、旦那に知れツこはありやしないよ。でもそれでも料りょうけん簡かんがならなけり

やお前でも可い、お前でも可いからね、実はあの隠れ忍んで、ようよう拵こしらえたこの召食あがるもの事をそつと届けて来ておくれ、よ、後生だよ。私に一目逢おうとつてその位に辛抱遊ばす、それを私の身になつちやあ、ま、どんなだろうとお思いだ。え、後生だからさ、もう、私や居ても、起たつても、居られやしないよ。後生だからさ、ちよつと届けて来ておくれなね。」

伝内はただ頭こうべを掉ふるのみ。

「何を謂わツしても駄目なこんだ。そりや、は、とても駄目でござる。こんなことがあるうと思わっしやればこそ、旦那様が扶持ふちい着けて、お前めえさま様の番をさして置かつしやるだ。」

お通はいとも切なき声にて、

「さ、さ、そのことは聞えたけれど……ああ、何と云って頼みよ
うもない。一層お前、わ、私の眼を潰つぶしておくれ、そうしたら顔
を見る憂きづかい慮いけねもあるまいから。」

「そりや不可いけねえだ。何でも、は、お前めえさま様に氣を着けて、蚤のみにも
ささせるなという、おつしやりつけだアもの。眼を潰すなんてあ
てごともない。飛んだことをいわつしやる。それにしてもお前様
眼が見えねえでも、口が利くだ。何でも、はあ、一切、男と逢わ
せることと、話談はなしをさせることがならねえという、旦那様のおつ
しやりつけだ。断念あきらめてしまわつしやい。何と云っても駄目でご
ざる。」

お通は胸も張裂くばかり、「ええ。」と叫びて、身を震わし、

肩をゆりて、

「イ、一層、殺しておしまいよう。」

伝内は自若として、

「これ、またあんな無理を謂うだ。蚤にも喰わすことのならねえものを、何として、は、殺せるこんだ。さ駄々を捏ねえでこちらへござれ。ひどい蚊だがのう。お前様アくわねえか。」

「ええ、蚊がくうどころのことじゃないわね。お前もあんまり因^いん^ん業^{ごう}だ、因業だ、因業だ。」

「なにその、いわっしやるほど因業でもねえ。この家をめざしてからに、何遍も探偵が遣^やつて来るだ。はい、麻畑と謂つてやりや、即座に捕まえられて、吾^{おれ}も、はあ、夜^よの目も合わさねえで、お前

様を見張るにも及ばずかい、御褒美も貰もらえるだ。けんどもが、何も旦那様あ、訴人をしろという、いいつけはしなさらねえだから、吾おら知らねえで、押おつとお通しやさ。そんなわりにやあまた、いいつけられたことはハイ一寸もずらさねえだ。何でも戸外おもてへ出すことになりましねえ。腕うでずくでも逢わせねえから、そう思ってくれさつしやい。」

お通はわつと泣なき出しぬ。

伝内は眉ひそを顰ひそめて、

「あれ、泣かあ。いつもねえことにどうしただ。お前様婚礼の晩床入もしねえでその場おんだツからこつちへ追出されて、今じや月日も一年越、男猫も抱かないで内またにばかり。敷居も跨またがすなというい

いつけで、吾に眼張がんばつとれというこんだから、吾おりや、お前様の、心
 が思いやられるで、見ているが辛いでの、どんなに断ろうと思つ
 たか知ンねえけんど、今の旦那様三代めで、代々養なわれた老夫じじい
 だで、横のものをば縦たて様にしろと謂われた処で従わなけりやなん
 ねえので、畏かしこまつたことは畏つたが、さてお前様がさぞ泣続けるこ
 んだらうと、生命いのちが縮まるように思つただ。すると案じるより産うむ
 が安いで、長い間こうやって一所に居るが、お前様の断念あきらめの可
 いには魂消たまげたね。思いなしか、気のせいか、段々やつ窶れるようには
 見えるけんど、ついぞ膝も崩した事なし、整然ちゃんとして威勢がよく
 つて、吾、はあ、ひとりでに天窓あたまが下るだ、はてここいらは、田
 舎も田舎だ。どこに居た処で何の楽たのしみもねえ老夫じじいでせえ、つまらね

えこつたと思つて、気が滅入るに、お前様は、えらい女だ。面壁
 イ九年とやら、悟つたものだ。と我あ折つていたんだがさ、薬袋
 もないことが湧いて来て、お前様ついぞ見たこともねえ泣かつし
 やるね。御心中のウ察しねえでもねえけんどが、旦那様にやあ、
 代えられましねえ。はて、お前様のようでもねえ。断念めてしま
 わつしやい。どのみちこう謂出したからにやいくら泣いたつて
 そりや駄目さ。」

しかり親仁のいいたるごとく、お通は今に一年間、幽閉された
 この孤屋に処して、涙に、口に、はた容儀、心中のその痛苦
 を語りしこと絶えてあらず。修容正肅ほとんど端倪すべからざ
 るものありしなり。されど一たび大磐石の根の覆るや、小石の転

ぶがごときものにあらず。三昼夜麻畑の中に蟄ちっぷく伏して、一たびその身に会せんため、一粒りゅういの飯をだに口にせで、かえりて湿虫の餌えばとなれる、意中の人の窮苦には、泰山といえども動かで止やむべき、お通は転倒てんどうしたるなり。

「そんなに解っているのなら、ちよつとの間、大眼おおめに見ておくれ。」

と前後も忘れて身をあせるを、伝内いささかも手を弛ゆるめず、

「はて、肯分ききわけのねえ、どういふものだね。」

お通は涙にむせいりながら、

「ええ、肯分がなくツても可いよ、お放し、放しなつてば、放しなよう。」

「是非とも肯かなけりや、うぬ、ふん縛つて、動かさねえぞ。」

と伝内は一呵せり。

宜しこそ、近藤は、執着の極、婦人をして我に節操を尽さ

しめんか、終生空閨を護らしめ、おのれ一分時もその傍にあら

ずして、なおよく節操を保たしむるにあらざるよりは、我に貞な

りとはいうことを得ずとなし、はじめよりお通の我を嫌うこと、

蛇蝎もただならざるを知りながら、あたかも渠に魅入たらんごと

く、進退隙なく附絡いて、遂にお通と謙三郎とが既に成立せる

恋を破りて、おのれ犠牲を得たりしにもかかわらず、従兄妹同

士が恋愛のいかに強きかを知れるより、嫉妬のあまり、奸淫の

念を節し、当初婚姻の夜よりして、衾をともしせざるのみならず、

一たびも来りてその妻を見しことあらざる、孤屋ひとつやに幽閉の番人として、この老夫おやじをば扱えらびたれ。お通は止やむなく死力を出して、瞬時伝内とすまいしが、風にも堪えざるかよわき婦人おんなの、憂うきにやせたる身をもつて、いかで健腕に敵し得べき。

手もなく奥に引立てられて、そのままそこに押据えられつ。

たといいかなる手段にても到底この老夫おやじをして我に忠ならしむることのあたわざるをお通は断じつ。激げつこう昂おつこうの反動は太いたく渠をし
て落胆せしめて、お通は張はりもなく崩折くずおれつつ、といきをつきて、
悲しげに、

「老夫じいや、世話を焼かすねえ。堪忍しておくれ、よう、老夫おやや。」
と身を持余せるかのごとく、肱ひじを枕ねたおに寝僵ねたおれたる、身体からだは綿と

ぞ思われける。

伝内はこの一言を聞くと斉しく、窪める両眼に涙を浮べ、一座退りて手をこまぬき、拳を握りてものいわず。鐘声遠く夜は更けたり。万籟天地声なき時、門の戸を幽に叩きて、

「通ちやん、通ちやん。」

と二声呼ぶ。

お通はその声を聞くや否や、弾械のごとく飛起きて、屹と片膝を立てたりしが、伝内の眼に遮られて、答うることを得せざりき。戸外にては言途絶え、内を窺う氣勢なりしが、

「通ちやん、これだけにしても、逢わせないから、所詮あかないとあきらめるが……」

呼吸も絶げに途絶え途絶え、隙間を洩れて聞ゆるにぞ、お通は
いづまいととの居坐直整えて、畳に両手を支えつつ、行儀正しく聞きいたる、
せな背打ふるえ、髪ゆらぎぬ。

「実はね、叔母さんが、謂うから、仕方がないように、いつてい
 たけれど、逢いたくツて、実はね、私が。」

といいかかれる時、犬二三頭高く吠えて、謙三郎を囲めるなら
 んか、叱ツ叱ツと追うが聞えつ。

更に低まりたる音調の、風なき夜半よわに弱々しく、

「実はね、叔母さんに無理を謂つて、逢わねばならないようにし
 てもらいたかった。だからね、私にどんなことがあるうとも叔母
 さんが気にかけないように。」

と謂う折しも凄まじく大戸にぶつかる音あり。

「あ、痛。」

と謙三郎の叫びたるは、足や咬まれし、手やかけられし、犬の毒牙どくがにかかれるならずや。あとは途ぎれてことばなきに、お通はあるにもあらぬ思い、思わず起たつて駈出かけいでしが、肩肱いかめしく構えたる、伝内を一目見て、蒼あおくなりて立竦たちすくみぬ。

これを見、彼を聞きたりし、伝内は何とかしけむ、つと身を起して土間に下立おりたち、ハヤ懸かけがね金に手を懸けつ。

「ええ、た、た、たまらねえたまらねえ、一か八かだ、逢わせてやれ。」

とがたりと大戸引開けたる、トタンに犬あり、颯さっと退のきつ。

懸寄るお通を伝内は身をもて謙三郎にへだてつつ、謙三郎のよ
ろめきながら内に入らんとあせるを遮り、

「うんや、そうやすやすとは入れねえだ。旦那様のいいつけで三
原伝内が番する間は、敷居も跨がすこつちやあねえ。断て入るな
ら吾を殺せ。さあ、すつぱりとえぐらつしやい。ええ、何を愚
々々、もうお前様方のように思い詰りや、これ、人一人殺され
ねえことあねえ筈だ。吾、はあ、自分で腹あ突いちやあ、旦那様
に済まねえだ。済まねえだから、死なねえだ、死なねえうちおやしは邪
魔アするだ。この邪魔物を殺さつしやい、七十になる老夫だ。殺
し惜くもねえでないか。さあ、やらつしやい。ええ！ 埒うちのあか
ぬ。」

と両手に襟を押開けて、仰のけざま様に咽喉のどぼとけ仏を示したるを、謙三郎はまたたきもせで、ややしばらくみつ瞋めたるが、銃劍いっせん一閃し、暗やみを切つて、

「許せ！」

という声もろとも、咽喉のんどに白刃しらばを刺されしまま、伝内はハタと僵たおれぬ。

同時に内に入らんとせし、謙三郎は敷居につまずき、土間に両手をつきざまに俯うつがし伏ふしになりて起きも上らず。お通はあたかも狂気のごとく、謙三郎に取とりすが縋すがりて、

「謙さん、謙さん、私や、私や、顔が見たかった。」

と肩に手を懸け膝ひざに抱いだける、折から靴音、劍摩ひびきの響ひびき。五六名ど

やどやと入いりきたりて、正体もなき謙三郎をお通の手より奪い取り
 て、有無を謂わせず引立ひつたつるに、啊呀あなやとばかり跳起はねおきたるまま、
 茫然として立ちたるお通の、齒をくいしばり、瞳を据えて、よろ
 よろと僵たおれかかれる、肩を支えて、腕を掴つかみて、
 「汝うぬ、どうするか、見ろ、太い奴だ。」
 これ婚姻の当夜以来、お通がいまだ一たびも聞かざりし鬱うつし怒いか
 れる良人の声なり。

四

出征に際して脱營せしと、人を殺せし罪とをもて、勿論謙三郎

は銃殺されたり。

謙三郎の死したる後のちも、清川の家における居馴れし八畳の渠かれが書斎は、依然として旧態を更あらためざりき。

秋の末にもなりたれば、籐とうむしろ筵てんに代うるに秋野の錦にしきを浮織うきおりにせる、花毛氈はなもうせんをもつてして、いと華々しく敷詰めたり。

床なる花瓶の花も萎しぼまず、西向の櫃れんじ子もとの下なりし机の上も片づきて、硯すずりの蓋ふたに塵ちりもおかず、座蒲団ざぶとんを前に敷かたき、傍かたわらなる桐火桶きりひおけに烏しやくどう金ひぼしの火箸ひばしを添そえて、と見ればなかに炭火すすも活いけつ。

紫したんの角かくの茶盆ちあひらの上には幾個の茶碗ちawanを俯伏うつぶせて、菓子かしを装もたる皿しらをも置けり。

机の上には一葉の、謙三郎の写真を祭り、あたりの襖ふすまを閉切り

たれば、さらでも秋の暮なるに、一室しん森とほのあかるく四隅はよ
うよう暗くなりて、ものの音さえ聞えざるに、火鉢に懸けたる鉄
瓶の湯気のみ薄く立のぼりて、湯の沸たぎる音静しずかなり。折から彼方かなたよ
り襖を明けつ。一脈の風の襲おそい入りて、立昇る湯気の靡なびくと同時
に、陰々たるこの書齋をば真白き顔の覗のぞきしが、

「謙さん。」

と呼び懸もすけつ。裳たてこすらすら入りざま、ぴたと襖を立籠めて、室へや
の中央なかばに進み寄り、愁しゆうぜん然ぜんとして四辺あたりみまわを眴みまわし、坐りもやらず、
頤おとがいを襟うずに埋うずみて悄しやうぜん然ぜんたる、お通おもかばの倅かばれたり。

やがて桐火桶の前に坐して、亡き人の蒲団を避よけつつ、その傍そば
に崩折くずおれぬ。

「謙さん。」

とまた低声こゝろこえに呼びて、もの驚きをしたらんごとく、肩をすぼめて首低うなだれつ。鉄瓶にそと手を触れて、

「おお、よく沸いてるね。」

と茶盆に眼を着け、その蓋を取のけ、冷ひややかなる吸子きゆうすの中を差さ覗しのぞき、打うちしお悄しおれたる風情にて、

「貴下あなた、お茶でも入れましょうか。」

と写真を、じつと瞻みまもりしが、はらはらと涙を溢こぼして、その後はまたものいわず、深おもき思いに沈みけむ、身動おもきだにもなさざりき。

落葉さらりと障子を撫でて、夜はようやく迫りつつ、あるかなきかのお通の姿も黄たそがれ昏おほの色に蔽おほわれつ。炭火のじょうの動く時、

いかにしてか聞えつらむ。

「ツウチヤン。」

とお通を呼べり。

再び、

「ツウチヤン。」

とお通を呼べり。お通は黙想の夢より覚めて、声する方かたを屹きつと仰ぎぬ。

「ツウチヤン。」

とまた繰返せり。お通はうかうかと立たち起あがりて、一步を進め、二歩を行ゆき、椽側いに出で、庭に下り、開け忘れたりし裏の非常口よりふらふらと立出でて、いずこともなく歩み去りぬ。

かくて幾分時のその間、足のままに徜徉さまよえりし、お通はふと心着きて、

「おや、どこへ来たんだらうね。」

とその身みずからを怪あやしみたる、お通は見るより色を変えぬ。

ここぞ陸軍の所轄に属する埋葬地の辺あたりなりける。

銃殺されし謙三郎もまた葬られてここにあり。

かの夜よき、お通は機会を得て、一たび謙三郎と相抱き、互に顔をも見ざりしに、意中の人は捕縛されつ。

その時既に精神的絶え果つべかりし玉の緒を、医療の手にて取留められ、活いくるともなく、死すにもあらで、やや二ヶ月を過ぎつる後のち、一日重隆のお通を強いて、ともに近郊に散策しつ。

小高き丘に上りしほどに、ふと足あしもと下に平地ありて広袤こうぼう一円十町余、その一端には新しき十字架ありて建てるを見たり。

お通は見る眼も浅ましきに、良人は予め用意やしけむ、従卒に持つて来させし、床しょうぎ几をそこに押並べて、あえてお通を抑留して、見る目を避くるを許さざりき。

武歩たちまち丘きゆうか下に起りて、一中隊の兵員あり。樺色かばいろの囚徒の服着たる一個の縄なは附を挟さしみて眼界さしはさ近くなりけるにぞ、お通は心から見るともなしに、ふとその囚徒を見るや否や、座右ざうの良人を流なが眊しめに懸けつ。かつて「どうするか見ろ」と良人がいいし、それは、すなわちこれなりしよ。お通は十字架を一目見てしだに、なお且つ震いおののける先さの状さまには引変えて、見る見る囚徒めが面

縛んばくされ、射手の第一、第二弾、第三射撃の響ひびきとともに、囚徒が固く食いしばれる唇を洩もれる鮮血の、細く、長くその胸間に垂れたるまで、お通は瞬またたきもせず瞻みまもりながら、手も動かさず態なりも崩さず、石に化したるものごとく、一筋二筋頬にかかれる、後おくれげ毛だにも動かさざりし。

銃殺全く執行されて、硝しょうえん烟の香の失うせたるまで、尉官は始終お通の挙動に細かく注目したりけるが、心地好よげに髯ひげを捻ひねりて、

「勝手に節操を破つてみる。」

と片頬に微笑を含みてき。お通はその時蒼あおくなりて、

「もう、破ろうにも破られません。しかし死、死ぬことは何時なんどきでも。」

尉官はこれを聞きもあえず、

「馬鹿。」

と激しくいいすくめつ。お通の首の低るるを見て、

「従卒、家まで送つてやれ。」

命ぜられたる従卒は、お通がみずから促したるまで、恐れて起つことをだに得せざりしなり。

かくてその日の悲劇は終りつ。

お通は家に帰りてより言行ほとんど平時のごとく、あるいは泣き、あるいは怨じて、尉官近藤の夫人たる、風采と態度とを失うことをなさざりき。

しかりし後、いまだかつて許されざりし里を許されて、

お通は実家に帰りしが、母の膝下しつかに来るとともに、張詰めし氣の弛ゆるみけむ、渠かれはあどけなきものとなりて、泣くも笑うも嬰兒あかごのごとく、ものぐるおしき体ていなるより、一日のばしにいいのばしつ。

母むすめは女を重隆もとの許もとに返さずして、一月余あまりを過してき。

されば世に亡き謙三郎の、今も書齋いままに在すがごとく、且つ掃き、且つ拭ぬぐい、机を並べ、花を活け、茶を煎せんじ、菓子を挟むも、みなこれお通が堪えやらず忍びがたなき追慕の念の、その一端をもらせるなる。母むすめは女の心を察して、その挙動のほとんど狂者のごときにもかかわらず、制し、且つ禁ずることを得ざりしなり。

お通は琵琶ぞと思ひしなる、名を呼ぶ声にさまよい出でて、思
 わず謙三郎の墳墓なる埋葬地の間近に來り、心着けば土饅頭の
 いまだ新らしく見ゆるにぞ、激しく往時を追懷して、無念、愛
やく惜、絶望、悲惨、そのひとつだもなおよく人を殺すに足る、い
 ろいろの感情に胸をうたれつ。就なかんづく中重隆が執念しゅうねき復讐くわだての企
 にて、意中の人の銃殺さるるを、目前我身に見せしめ、当時の無
 念禁ずるあたわず。婦人おんなの意地と、張はりとのために、勉めて忍びし
うつぶん鬱憤の、幾十倍の勢いきおいをもつて今満身の血を炙あぶるにぞ、面は蒼ざ
くれないめ紅の唇白歯しらはにくいしばりて、ほとんどその身を忘るる折から、
 見遣る彼方あなたの薄原すすきはらより丈高き人物あらかわ頭れたり。

濶歩埋葬地の間をよぎりて、ふと立停ると見えけるが、つかつかと歩をうつして、謙三郎の墓に達り、足をあげてハタと蹴り、カツパと唾をはきかけたる、傍若無人の振舞の手に取るごとく見ゆるにぞ、意気激昂して煙りも立たんず、お通はいかで堪うべき。駈寄る婦人の跫音に、かの人物は振返りぬ。これぞ近藤重隆なりける。

渠は旅団の留守なりし、いま山狩の帰途なり。ハタと面を合せる時、相隔ること三十歩、お通がその時の形相はいかに凄まじきものなりしぞ尉官は思わず絶叫して、

「殺す！ 吾を、殺す※」

というよりはやく、弾装したる猟銃を、戦きながら差向けつ。

矢や銃弾も中らばこそ、轟然一射、銃声の、雲を破りて響くと同時に、尉官は苦と叫ぶと見えし、お通が鬚を両手に掴みて、両々動かざるもの十分時、ひとしく地上に重り伏せしが、一束の黒髪はそのまま遂に起たざりし、尉官が両の手に残りて、ひよろひよろと立上れる、お通の口は喰破れる良人の咽喉の血に染めり。渠はその血を拭わんともせで、一足、二足、三足ばかり、謙三郎の墓に居寄りつつ、裏がれたる声いと細く、

「謙さん。」

といえるがまま、がツくり横に僵れたり。

月青く、山黒く、白きものあり、空を飛びて、傍の枝に羽音を留めつ。葉を吹く風の音につれて、

「ツウチャン、ツウチャン、ツウチャン。」

と二たび三たび、こだま 劔を返して、琵琶はしきりに名を呼べり。琵琶はしきりに名を呼べり。

明治二十九（一八九六）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成²」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年4月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 別巻」岩波書店

1976（昭和51）年3月26日発行

初出：「国民之友」

1896（明治29）年1月

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年7月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

琵琶伝

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>